

深まる原発避難者の苦悩

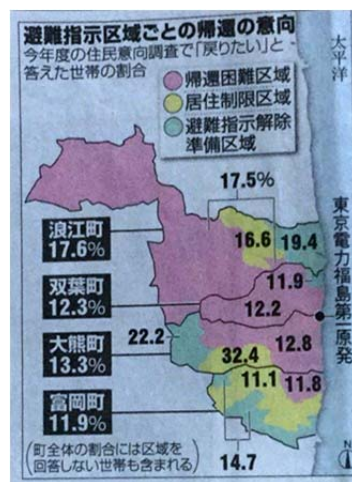
表題と写真は毎日新聞 2 月 28 日「柳田邦男の深呼吸」である。毎月 1 回の連載だが、いつも鋭い指摘に刺激をうけている。今回は大震災から 4 年の原発避難者を取りあげ、今なお続く原発事故の深刻な状況について問題を提起する。

「福島県で今も避難生活をしている人は約 12 万人いるが、そうした人々の間には、帰郷できるのかどうかの将来展望があいまいなまま歳月が過ぎていく中で、さまざまな問題が深刻化している。事故直後に一斉に避難を提示された時、『2、3 日で帰れる』と最低限の物しか持たずに家を出たが、その期待はすぐに打ち砕かれた。それでもはじめの半年くらいは、避難先で大半の人々は『みんな一緒に帰ろう』という『地域共同体』の意識が強かった。しかし、1 年、2 年とたつうちに、同じ喪失感でつながる『災害ユートピア』の状況は消え、地域の経済、医療、保育、教育への不安から、帰還をあきらめて他地域（主に大都市）に移住する人が増え始めた。それと並行して、帰還の条件を

めぐって、避難者の考え方が複雑に分かれるようになった。人は将来に希望を持てるものが見えない時、精神的に不安定になりがちだし、頑張ろうとする意志を失いがちだ。

この国の政治と行政は、たとえ、遅きに失したとはいえ、原発事故の被害の全容をしっかりと調査して課題を明確にする制度をきちんと作り、被災地と被害者の真の再生のためのプロジェクトをスタートさせるべきだ。」

下の写真は朝日新聞 2 月 25 日掲載の避難指示区域ごとの帰還の意向である。東京電力福島第 1 原発の立地・周辺 4 町（浪江・双葉・大熊・富岡）で、ふるさとに戻りたいと考える避難世帯の割合は、国の避難指示の種類によらず、おおむね 1~2 割しかないことが復興庁の調べで分かった。これは「深まる原発避難者の苦悩」の一端を示すものだ。4 年たっても、復興はまだ遠い。



(2015 年 3 月 4 日)